

三、諸子百家の時代（二）――道家・陰陽家・名家――

- ・和其光、同其塵。〔『老子』第四章〕
- ・絶學無憂。〔『老子』第四十一章〕
- ・狙公賦茅曰、「朝三而暮四。」衆狙皆怒。曰、「然則朝四而暮三。」衆狙皆悦。〔『莊子』齊物論篇〕
- ・不知、周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与。〔『莊子』齊物論篇〕

一、道家

一・一、『老子』の思想

- ・「¹老子」――（老聃^{ろうたん}）：儒家の孔子と同じ頃に活動したとされるが、その伝記は曖昧で、実在の人物であったのかについては古くから論争が続いている。しかし、相次ぐ新出土文献（竹簡・帛書）の発見により、『老子』の成立と流布は、伝承通り春秋戦国時代であったことがほぼ確定。
- ・『老子』の内容は、儒家とは異なり、宇宙の根源や世界の生成に対する思索を特徴とする。

（第二章）宇宙の本源は「²道」であると説き、そこは混沌とした「³無」の状態であり、そこから段階を追って「⁴天地万物」が生じてきたと考える。

↓世界の根源として、名づけることさえできない「道」を想定。

この姿を理想として、「⁵処世」のあり方を説く。

（第九章）「天の道」にかなう身の処し方。

「⁶自然」に沿って無理をせず、一身身を退くという生き方。

人々は学問による向上を目指し、立身出世を人生の重要な目的とするが、『老子』は逆に、身を退くことが世界の正しいあり方であるという。

↓世俗の人々の頑張りは決して長続きはせず、かえって人の心を不幸にする。

（第七章）天と地は悠久であり、太古の昔から確固として存在している。

その天地が悠久であるのは、人間とは違って、ことさらにみずから生きようとしなから。

「⁷無為自然」を守っているから、長くいつまでも生きることができる。

天地のあり方を体得した偉大な聖人は、自分の身を、努めて後ろにもつていく。

↓しかしまさにそのことによって、結局は人の先頭に立つことができる。

自分の身を努めて埒外（一定の範囲外）に置く。

↓しかしまさにそのことによって、結局はそこにもいつまでも存続している。

◎このような逆説的論法は、『老子』独特の文明観に基づく。

通常、人は「⁸文明化」を高く評価する。衣服、言語、農耕、車船、社会制度、それらが人間を他の動物から分け、人間を文明化させたと考ええる。そして「⁹儒家」は文明化をさらに推し進めるため、「¹⁰学問」の重要性を力説する。しかし『老子』は、まさにその文明化や学問の奨励こそが、人間を不幸にし、社会に混乱をもたらすのではないかと警告する。

一・二、『莊子』の思想

・「¹¹莊子」――（莊周）：儒家の孟子とほぼ同じ時期、戦国時代中期に活動した思想家。

莊子も「¹²道」の探求に特色を持つ。「道」とは、この世のすべてであり、相対的な価値観に彩られたこの世のすべてを受け入れるという「¹³超俗的な態度」を取る。

↓自らの「¹⁴価値判断」や、「¹⁵言語」に対する不信へと至る。

・「¹⁶明」という概念――言語を介しない悟りの境地。

莊子自身は言葉を経由しない超越的な認識方法「明」によって、この世界の真理を把握したと宣言。（後に中国に伝来する仏教、特に禪宗の立場に近い。）

◎老子と莊子は、儒家の奨励する文明化や学問の重視に対して、根本的な疑問を投げかけた。

↓「無為自然」であること、勝手な価値判断を下さないこと、言語に頼りすぎないことを重視。

両者は後に「¹⁷老荘思想」と称され、争乱に疲れた知識人の心をとらえていく。

一・三、その他の道家

- ・〔¹⁸〕 列子 ー (列禦寇) ー 戦国時代の思想家。その著として『列子』という書が伝わっているが、仏教に近い内容があるとして、後世の偽作ではないかという疑いが持たれている。
- ・〔¹⁹〕 楊朱 ー 戦国時代初期に活動。後に道家に分類。世俗の価値観にとらわれることを否定し、人生を謳歌せよと説く〔²⁰〕 快樂主義 ー を主張。政治思想としては非現実的であったが、利益と快樂を求めるといふ人間の本質を突いた思想として、当時の人々に共感された。

二、陰陽家

- 〔²¹〕 陰陽五行説 ー にもとづき、季節や色彩、方角などを重視し、禍福吉凶を予測する学派。
- ・〔²²〕 鄒衍 ー 戦国時代後期の齊の思想家で、陰陽五行説の大家。「談天衍」と称えられる。
- 〔²³〕 「氣」 ー 古代中国における物質の最小単位。「氣」を生ずる根源は「道」「太一」などの語で表されるが、世界の万物を構成し様々な現象を生成するのは、すべて「氣」と考えられた。「氣」の性質 ー 〔²⁴〕 陰 ー と 〔²⁵〕 陽 ー 。
- これらが組み合わさって、五つの氣を構成。↓〔²⁶〕 「五行」 ー
- 〔²⁷〕 木・火・土・金・水 ー の五つの氣は、さらに複雑な化合転変を繰り返す。
- 〔²⁸〕 相生 ー ー五つの氣が生成の関係で循環。
- 「木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ずる。」
- 〔²⁹〕 相剋 ー ー五つの氣が互いに相手を克服しながら循環。
- 「水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝つ。」
- こうして、氣は人間の心の内から世界の果てまでを貫通し、この世を作り上げていくとされる。

◎ 五徳終始説

〔³⁰〕 ー 鄒衍の代表的な学説。五つの氣(徳)が循環する形で、歴代王朝が興亡を繰り返すと説く政治思想。新たな時代の到来を五行説によって唱える。

三、名家

- 諸子百家の中で、最も哲学論議に長じた人々。認識と概念などを思索した論理学派。
- ・〔³¹〕 惠施 ー 戦国時代の宋出身の思想家。魏の恵王に宰相として仕え、莊子のよきライバルでもあった。車五台分の蔵書を持つ博士の士とされる。
- 中心思想 ー 「歷物」と呼ばれる十の命題。

〔³²〕 「至大」 ー (極限大) と 〔³³〕 「至小」 ー (極限小) の概念を提出。

「至大」を基準にすれば個物の違いなど無に等しくなり、「至小」を基準にすれば万物間の共通性はなくなり個々の違いが明瞭になる。↓俗世の人々の思考や価値観に大きな反省を促す。(こうして物に対する人々の真の愛が生ずると考える。)

- ・〔³⁴〕 公孫龍 ー 戦国時代の趙の人で、弁論術にすぐれる。

その著『公孫龍子』には、跡府・指物・堅白・白馬・通変・名実の六篇が残されている。

◎ 〔³⁵〕 白馬非馬論

〔³⁶〕 「白馬」 ー 色彩概念と形状概念の複合概念。

〔³⁷〕 「馬」 ー 形状のみの単一概念。

↓両者は基本的に位相を異にする。だから、「白馬」は「馬」ではない。

この論理は、通常の人間の認識能力に大いなる疑問を突きつけるもの。

こうした論理を背景に、公孫龍子は、人間個々が、各自の認識能力の限界を自覚した上で、名実の混乱を避けよと力説。しかし、そうした混乱を助長しているのは、下剋上の風潮と強大国による侵略戦争。それは、王や臣下の名実を混乱させ、社会秩序を崩壊させる。

↓公孫龍子は、諸国をめぐり、〔³⁸〕 「偃兵」 ー (非戦、兵を偃む) を説いた。

(単なる思想家ではなく、政治家としての顔も持ち合わせていた。)

その後、公孫龍は、趙の平原君の前で鄒衍との論争に敗れ、歴史の表舞台から姿を消す。

鄒衍 ー 五徳終始説を唱えて、次なる世界の到来を説く。

公孫龍子 ー 人間の認識能力の限界を指摘し、ひたすら偃兵を説く。